

第14回 小樽港フィールド・ラーニング(O.F.L)を開催しました —小樽の近代化遺産を学ぶ—

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

令和5年12月13日(水)、小樽港湾事務所において第14回小樽港フィールド・ラーニングを開催しました。

小樽港フィールド・ラーニングは、小樽築港開始時の計画、調査、設計、施工を始め我が国初の近代築港の計画、築造における廣井勇博士(初代小樽港湾事務所長)の工学の考え方等を学び、港湾技術者としての意識・技術・知識、港湾を含む社会資本整備の計画・説明力等の向上に効果的であり、小樽港(Otaru)で実物を見ながら(Field)習得(Learning)する意義は大きいと考え、平成23年度から開催しています。

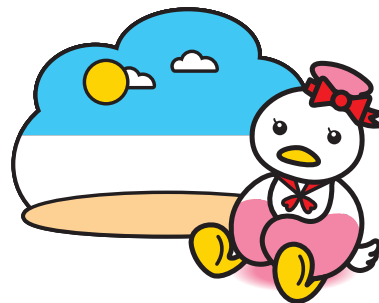
今回は、2名の講師を招いて講演を行い、北海道開発局職員、関係市町職員、建設会社、コンサルタントなどの関係者約90人(対面:約30人、Web:約60人)が参加しました。

1つめの講演は、小樽港湾事務所の早川所長により「北防波堤の設計に思いを馳せる～平成16年度の断面決定までを振り返る～」と題し、平成15年度～16年度に設計係長として北防波堤改修設計に携わり、廣井勇博士が設計した北防波堤の構造上の特徴を現地調査や水理模型実験から紐解き、その結果を踏まえて改修設計を行った際の当時の設計思想や悩みなどについてご講演いただきました。

続いて、2つめの講演は、小樽運河が完成してから100年を迎えたことから、小樽市総合博物館の石川館長により「『運河』100年と小樽港～斜陽の象徴から再生のシンボルへ～」と題し、小樽運河が誕生した背景や小樽港ふ頭整備によりその使命に終わりを告げ、荒廃していく変貌などについて当時の絵や写真とともにご講演いただきました。

石川館長の講演は、「当時の小樽運河は、舁荷役を念頭において利用されていたことや、廣井勇博士の助言を受けながら小樽港の整備とともに運河も整備されたこと、その後、小樽運河と石造・煉瓦倉庫群も含めた保存活動の歴史等に触れ、今後の活用について考えていく必要がある。」との内容でした。

今回の小樽港フィールド・ラーニングでは、現在、改良工事を進めている北防波堤の設計思想や小樽運河が果たしてきた役割など、小樽市発展の礎となった近代化遺産を学ぶ良い機会となりました。



小樽港湾事務所 早川所長



小樽市総合博物館 石川館長